台湾人日本語学習者が破裂音を聞き取る際の問題点について

－異音を考慮に入れた実験に向けて－

林　嘉惠

1．はじめに

今までの中国語話者の破裂音の発音や聞き取りの傾向：

発音：有声音→無声無気音

聞取：無声無気音→有声音

これではコミュニケーションに支障をきたしかねないと思われ、この現状を改善するため、さまざまな研究がなされてきた。Ex.水谷(1974)、蔡((1979)、劉(1983)、黄(1983)酒入((1991)、周(1992)、福岡(1996)、林(1996)。これらの各論文が出した指導方法を参考に、現在現場では以下のような指導を施している：

有声音：声帯が先に振動

無声音：語頭→弱い有気音

語中→極弱い有気音～無気音

しかし、この方法で指導すると、いつも次のような新たな問題点にぶつかる。

①発音：無気音を息が出ないようにする余り、有声音になってしまう。つまり、無気音と有声音のVOT(voice onset time=声の開始時間)のコントロールが難しい。

②聞取：中国語の無気音に聞こえるもの、たとえそれが有声音でも無声無気音と聞き取ってしまう。

現場でいくら発音して聞かせても有声と無声の違いがわかってもらえないため、指導法にまだ問題があると言えよう。

今日まで、台湾における日本語音声教育では破裂音の導入は有気無声音と無気無声音のところに重点を置いているが、有声破裂音（破擦音）には摩擦音[β][ʒ][z][ɣ]の異音があることにはあまり触れていない。川上(1977)、天沼(1978)、黄(1983)諸氏の論文では摩擦音についてふれているものの、異音があるという事実を述べるだけにとどまっている。従って、従来の破裂音の指導法は異音というのがあまり考慮されていないのが実情である。発音のほうは意図的に声帯を先に振動する訓練をしたり、有声摩擦音[β][ʒ][z][ɣ]で破裂音（破擦音）を代用したり、無声音を全部有気音で発音したりすることで、区別できないことはないのだが、聞き取りだと、異音によって、聞き取りやすい音と聞き取りにくい音がはっきりあるように思えるので、その知識がないと聞き取れない場合が多

いはずである。現れる条件によって、どの異音になるかということがわかれば、苦手とする環境だけ整理しておくと、指導にあたって役に立つに違いない。

各破裂音の異音が現れる環境を整理してみると次のようになる。

音素	条件		異音
/p/	語頭		[pʰ]
	語中		[p]
/b/	母音間		[β]
	非母音間		[b]
/t/	＋/a//e//o/	語頭	[tʰ]
		語中	[t]
	＋/i/	語頭	[tɕʰ]
		語中	[tɕ]
	＋/u/	語頭	[tsʰ]
		語中	[ts]
/d/	＋/a//e//o/		[d]
	＋/i/	母音間	[ʒ][dʒ]
		非母音間	[dʒ]
	＋/u/	母音間	[z][dz]
		非母音間	[dz]
/k/	語頭		[kʰ]
	語中		[k]
/g/	母音間		[ɣ][ŋ]
	非母音間		[g]

表中の異音は台湾人学習者にとって難しい音声とそうでない音声がありそうである。異音によって、聞き取りやすい音とそうでない音が果たしてあるかどうかを検証するため、以下の予備調査を行った。

2．予備調査

① ハジ（摩擦音[ʒi]）

② ハジ（破擦音[dʒi]）

③ ハチ（無気破擦音[tɕi]）

④ ハチ（有気破擦音[tɕʰi]）

①～④を各１０回ずつランダムに並べ替えて日本語話者２人、台湾人上級者２人、台湾人初級者４６人、計５０人に、１人につき４０回ずつ聞かせ、「ハジ」であるか「ハチ」であるかを判断してもらった。その結果は以下の通りである。

〈正答率〉

国別 / 項目	日本語話者 (2人)	台湾人上級者 (2人)	台湾人初級者 (46人)
①[ʒi]	100%(20/20)	100%(20/20)	98%(453/460)
②[dʒi]	100%(20/20)	85%(17/20)	78%(360/460)
③[tɕi]	100%(20/20)	45% (9/20)	63%(291/460)
④[tɕʰi]	100%(20/20)	100%(20/20)	96%(442/460)

（※括弧（　）の中は分数で、被験者が聞いた音の回数が分母、その中の正答の数が分子である。）

予備調査の結果：

1．①[ʒi]は日本語話者も台湾人被験者も正答率が100%かそれに近いパーセンテージを示した。台湾人にとって、初心者にも習得しやすい音であると言えよう。

2．②[dʒi]は日本語話者が100%聞き取れたのに対して、台湾人は初級、上級両方とも①に比べ正答率のパーセンテージが下がった。

3．有声摩擦音である[ʒ]は有声と聞き取りやすいのに対し、有声破擦音の[dʒ]は無声と聞き誤るものがあることがわかった。

4．③[tɕi]は日本語話者が100%聞き取れたのに対して、台湾人は初級、上級両方とも正答率が低かった。

5．④[tɕʰi]は①と同様、日本語話者も台湾人被験者も正答率が100%かそれに近いパーセンテージを示した。台湾人にとって、初心者にも習得しやすい音であると言えよう。

6．有気破擦音である[tɕʰ]は無声と聞き取りやすいのに対し、無気破擦音の[tɕ]は有声と聞き誤るものが50%に近く、ほぼチャンスレベルにまで達している。

7．まったく同じ音声環境でも、このような音声の違いで聞き誤りに差が出ることが明らかとなった。

8．台湾人初級、上級学習者全部合わせて48名のうち全員正解だったのはたったの三人（6%）にとどまった。普段から有声と無声の誤聴や混同が見られることが伺える。

9．特に成績のいい学生ほど有声音[dʒi]を無気無声音[tɕi]に聞いてしまう傾向がある。

10．上級の2人の被験者は今までの台湾人学習者と同じ傾向の誤聴が起こる。つまり、かなり上級になっても、はっきり有声、無声の区別がつかない場合が多いようである。この2人とも台湾の日本語学科出身で、昔の方法で、つまり日本語の有声音は中国語の無気音を、日本語の無声音は中国語の有気音を使うという方法で習ったそうである。今大学の助手をしているため、日本語話者と接触することが多い。しかし、この2人のうち、日本に留学経験がないほうの1人は無声無気音[tɕi]を10回のうち9回も有声音に判断した。

結果としては、旧方法で教わった学習者は無声無気音[tɕi]が非常に高い誤聴率で問題となり、新しい方法で教わった学習者は上で述べたように無声無気音[tɕi]に加えて、有声音[dʒi]も問題になってくるが、後者のほうは両者の誤聴率の差が縮む。この結果によって、聞き取りにおける異音の指導が大切であることを裏付けたと言えよう。

今後は日本語に現れるすべての環境（中国語では1拍と数えるもの、たとえばCVCも含む）について異音を取り上げ、聴取実験などを通して検討をする予定である。そして、どの環境が聞取りにくいかを考察し、新たな指導対策を考えたい。

< 参考文献>

1.天沼寧ほか(1978)『日本語音声学』くろしお出版

2.川上蓁(1977) 『日本語音声概説』桜楓社

3.黄國彦(1983)『中日両語対照分析論集』中國文化大学東語系日文組

4.蔡茂豊(1979)『中国人に対する日本語教育の理論と実践ー音声教育篇』東呉大学日本文化研究所

5.酒入郁子(1991)「I音声」『外国人が日本語教師によくする100の質問』バベル・プレス

6.周錦樟(1992)「ケース24 中国語話者への教育」『ケーススタディ日本語教育』桜楓社

7.朱春躍(1994)「中国語の有気・無気子音と日本語の無声・有声子音の生理的・音響的・知覚的特徴と教育」『音声学会会報』205

8.福岡昌子(1995)「北京語・上海語を母語とする日本語学習者の有声・無声破裂音の横断的および縦断的習得研究」『日本語教育』87号

9.福岡昌子(1996)「日本語の有声破裂音の習得上の問題点とVT法を使った発音矯正ー北京方言を母語とする中国人日本語学習者を対象としてー」『日本語教育研究』32号言語文化研究所

10.福岡昌子(1997)「中国人学習者が母語として捉えた日本語の無声破裂音の知覚についてーアクセントとの関わりも含めてー」『語学教育研究論叢』14号

11.水谷修(1974)「音声教育の問題点ー有気音・無気音の対立をもつ言語の使用者に対して日本語の有声音・無声音の識別・発音能力を与えるためのこころみー」『日本語教育研究』10号（財）言語文化研究所

12.劉淑媛(1983)「中国人学習者によく見られる発音上の誤りとその矯正方法」『日本語教育』53号

13.林嘉惠(1991)『日本語学習における「ダ」、「デ」、「ド」の発音習得についてー特に台湾人学習者の場合ー』東京外国語大学1991年度学士論文

14.林嘉惠(1996)「台湾人初級日本語学習者の発音における問題点の解明及びその指導法ー破裂音を中心にー」『文史学報』國立中興大学教務處

（明海大学大学院）